

特集

劔岳 東大谷(ひがしおおたん)

劔岳の東大谷(ひがしおおたん)は、劔本峰に突き上げる中俣本谷を中心とするヤツデの葉状の急峻な荒れ谷の集合体であって、劔の南西面を形作っている。この地域の開拓が遅れたのは、その地形の複雑さとアプローチの悪さ富山湾よりの気流を直接に受けるための天候の悪さなどによると思われる。

私自身芦嶺のガイドから「ひがしおおたんには足を踏み入れるな」というのが親父の遺言なのでといわれ、同行を断られた経験を持っている。

登山の活発化とともに、東大谷も1949年から3年間で、神戸山岳会、魚津高校、広島大学、鵬翔山岳会などによって集中的に開拓が進んだ。

このあと、残された課題を精力的に開拓したのが、京都府立大学であった。

われわれが、この危険きわまりないと云われ、ルートに未知の部分を残すこの東大谷に入ったのは、仲間の遺体捜索というよんどころない事情による。

1956年3月、劔岳登頂の帰途におこった前劔の下りでの滑落遭難事故である。

5月よりの雪解けを待って、東大谷出合いをベースに、連日のパトロールによる捜索活動が行われた。

その結果、東面にはないその暗さと静けさと未知を解明する喜びに取り付かれて行き、未踏のルートに登ろうとしたのだろう。

